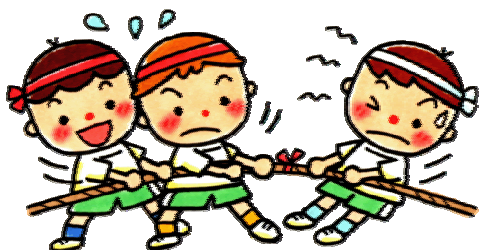


# ほっと通信

早いもので10月になりました。子どもたちは遠足、運動会、音楽鑑賞教室などの行事を楽しんでいることと思います。

1学期、特別支援センターには、延べ128回の巡回相談の要請があり、実施しました。昨年度に比べ要請数が増えており、校内での取り組みが少しずつ進んでいると感じています。2学期も、特別支援センターは学校と一緒に児童・生徒の支援を考えていきたいと思っています。



本号は八王子市内の各学校での取り組みや、特別支援センターが巡回相談で実施している発達検査の内容、市内の先生方の具体的な工夫などをお届けします。

## <元八王子東小学校> 特別支援教室をリソースルームとして活用

今年度、元八東小は次の二つを重点に取り組んでいます。

一つめは個別指導計画の具体化です。

担任が、実践をしてきちんと評価できるような、実際に役に立つ



具体性を持った個別指導計画を作りたいと思っています。具体性をもった指導計画を作るためには、そのもとになるアセスメントをきちんとすることが不可欠です。そのために特別支援センターの巡回相談を利用して授業観察や発達検査をお願いしたり、様々なスクリーニングテストを用いたりして、より綿密な実態の把握に努めています。実際の計画の作成にあたっては「東京の教育21」で開発委員の先生方が作られた個別指導計画作成のためのヒント集なども参考にさせていただいています。

二つめはリソースルーム「えがお教室」の開設です。

どこの学級にも発達障害を含めて様々な理由から教室でみんなと一緒に学習に取り組めない子どもたちがいます。彼らの中には「どうせ僕なんか・・・」と学習に対する意欲を失い、投げやりな態度をとる子どもたちも少なくありません。「えがお教室」では、そんな子どもたちに、彼らの実態に応じた課題を、彼らに合ったペースとやり方で、じっくりと個別に指導をしていくことを通して、一人ひとりが基礎的な学力を身につけ、自信を取り戻し、自尊感情を高めていくよう支援をしています。

校内委員会で作られた個別指導計画で「えがお教室」での個別指導が有効であると判断され、保護者の了承が得られた子どもが週2～6時間通ってきます。特別支援サポーターやメンタルサポーター、ボランティアさんの協力を得て嘱託員の教員がリソース・ルーム・ティーチャ として指導にあたっています。

(特別支援教育コーディネーター 竹縄 光雄先生)

(リソースルーム・ティーチャー 楠 正明先生)

## < 鑑水中学校 > チームを組んで向き合っていく

月に1回、学年の教員・養護教諭・コーディネーター（CD）・スクールカウンセラー（SC）の計6名で、校内委員会を開いています。限られた時間ですが、不登校や、登校はしているが気がかりな子など、支援を要する生徒の情報交換や支援策などが継続して話し合わせ、担任や学年への具体的な働きかけや職員全体との連携の在り方なども検討します。

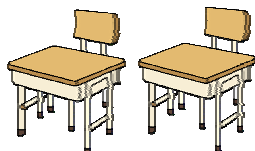
本校では、昨年、1名の生徒が、今年はさらに3名の生徒が特別支援センターの巡回相談のお世話になりました。授業観察や発達検査・聞き取りなどをもとに、センターの心理士・研究主事・保護者・担任・CD（時にはSC）が参加して、どのように支援していったらよいか話し合いを持ちました。

「なぜ、こういう行動をとるのか?」「どこで困っているのか?」「それはなぜなのか?」保護者や教員はもとより、生徒自身も理由や原因がわからず、途方にくれているのが実情です。巡回相談を何回か重ねるうちに「ああ、そうなのか。」と霧が払われるように目の前のものが見えてきたり、学校や保護者ができることは何なのかということを考えたりすることが出来ました。

「センター通信 No.1」によれば、昨年度は249回もの学校訪問をされたとか。本校もお世話になったうちの1校ですが、電話一本いれただけで、フットワークも軽く(?)巡回相談に対応していただけるありがたさ。心強さ。

なによりも大きな収穫は、巡回相談を通して、保護者との関係がより近づいたことかもしれません。我が子に対しての、心理の、教育の、それぞれの立場の大人たちが、親と一緒にチームを組んで向き合っていると少しでも感じられたからでしょうか。卒業後も見据えた進路について率直に話し合える素地もできてきたように感じます。

保護者・担任を中心としたケース会議の継続や職員全体の啓発と連携など、課題はありますが、特別支援センターの「支援」も仰ぎながら、今後も生徒や保護者の「支援」ができればと思っています。



(特別支援教育コーディネーター 大川瞳先生)

### キーワード

### 『発達検査』

巡回相談では、先生方や保護者の方とのご相談の中で、お子さんの実態を把握するために、必要に応じて発達検査をとらせていただくことがあります。ここでは、学齢期によく用いられるWISC<sup>ウィスクリュー</sup>についてご紹介します。

WISCは、全般的な知的発達の水準をはかるとともに、お子さんのなかにある発達の「偏り」をみることができる検査です。言語性IQと動作性IQのバランスや、4つの群指数のばらつきを見ることにより、得意なところや苦手なところを理解し、その子に合ったサポートを考えることができます。学校でのさまざまな行動の背景に、発達のアンバランスさや学びにくさが影響していることも少なくありません。

先生方が「この子の状態をどう理解したらよいか」「どう指導したらよいか」と思われたときに、こうした検査を参考にさせていただくのも、ひとつの方法だと思われま

### WISC

全検査IQ：全般的な知的発達の水準  
言語性IQ：ことばの理解・操作や、耳から入った情報を処理する力  
動作性IQ：図や絵の理解・操作や、目から入った情報を処理する力  
群指数：言語理解・知覚統合・注意記憶・処理速度の4種類で構成されています。

## ぽけっと

### 『どの子の学習も保障する工夫』



市内の先生お二人の具体的な工夫を紹介します。

**A 先生** 支援が意識から抜けてしまうことを防ぐ工夫です。学習指導案や週案簿の「指導上の留意点」に特別支援対象の児童に対する「具体的な支援策」を記入しておきます。

例えば、自分の考えを書かせる場面では、「『鉛筆』を持つように指示。課題を読ませる。『書きます』と指示。また、集団で話し合う場面では「ノートに考えが書けていたら指名。発言を促す。認める。」などと「具体的な支援策」を書いておくやり方です。

**B 先生** 個別指導の時間を確保する工夫です。プリント学習の場合、皆の力に対応できるように、両面刷りを準備します。表裏に問題をのせておき、表面の3題が解けた子どもから先生に見せに行きます。「 」がもらえた子には表面の残りの問題に取り組みせ、それが出来た子には出来た子同士で答え合わせをさせます。それもクリアした子には、裏面の問題に取り組みさせます。先生はその間に、最初の3題を取り組み続けている子どもの個別指導を行うという工夫です。最後に、授業で使ったものと同じプリントを渡し、同じ問題を家庭でも取り組みさせます。この方法は「自分の力で出来た」という自信を持たせることにつながっていくと思います。

また、授業で音読をさせる場合、全員を起立させて指定された範囲を1回読み終えた子から座らせ、最後の一人が座ったら「音読終わり」の指示を出すやり方です。着席した子にも、「終わり」の指示が出るまでは1回読み終わるごとに印を付け、複数回読み返すよう指示を出しておきます。漢字があまり読めない子には、教科書の漢字にふりがなをふらせておきます。こうすることで、課題を早くこなせる子どもにも学習時間の隙間を作らせず、課題をゆっくりこなす子どもも自分のペースで学ぶことができます。この方法は、全員が課題を取り組み続けているので、まだ最初の課題に取り組んでいる子ども達は目立ちにくく、安心できる形になっていると思います。(文責：心理士 太田真紀)

## 情報提供

### 教育支援人材バンクセンター

今年の4月、教育センター内に「教育支援人材バンクセンター」が設置されました。『特別支援教育の配当予算はもらったが、人を探すのが大変。』という声を聞くことがあります。

特別支援に限りませんが、地域の方の力を借りたい時にご利用ください。

教育支援人材バンクセンター 電話 664-1193

### 就学支援シート

10月から小学校では就学時健康診断が始まります。小学校や幼稚園・保育園の代表の皆さんが開発し、昨年度から実用化された「就学支援シート」を持って来られる保護者が増えてくると思います。是非、保護者の思いを受け止めていただくようお願いいたします。

## 巡回相談のご案内

特別支援センターの心理士・研究主事などが、授業観察、発達検査及び聞き取りなどを通して発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。特別支援学校のコーディネーターとも連携しています。

電話予約 情報共有 日程調整 巡回訪問 (状況により継続相談)

特別支援センター： 664-1615 (直通)

